第２５回文化財企画展

原遺跡第３次調査速報展

―古代東山道陸奥国「玉前駅家」・「玉前剗」推定遺跡の調査―

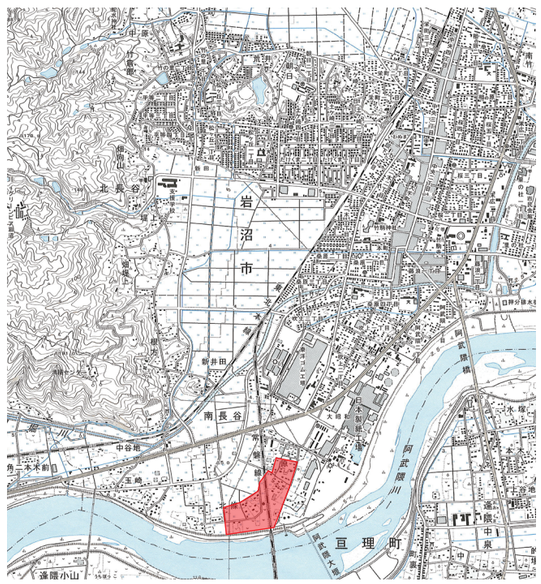
２０１９年4月２７日(土)～6月３０日(日)

原遺跡第3次調査で発見された大型の掘立柱建物跡

はじめに

原遺跡はＪＲ岩沼駅の南方約 3.2 ㎞に位置し、岩沼市南長谷字原・上原地内に所在します。遺跡範囲の中央にはＪＲ常磐線が南北に通っていますが、この常磐線を挟んだ東西の標高は５m前後と大差がなく、阿武隈川左岸で形成された東西方向にのびる自然堤防上で遺跡が営まれています。

10 世紀頃に成立したと考えられている『延喜式』の東山道陸奥国に設置された駅家を見ると、「玉前」という地名があります。また、多賀城跡より出土した９世紀代と推定されている木簡でも「玉前剗」という名称が記載されています。これらの資料の存在から、岩沼



原遺跡の位置（1/25,000）

古代の道路（駅路）でみる玉前駅家の位置

第３次調査のまとめ

第３次調査での最も大きな発見となったのは、Ⅱ期の遺構とした建物１・建物２という２棟の大型掘立柱建物跡を確認したことです。これらの建物は同様の規模（桁行 10 間・梁行３間）で、真北を強く意識して作られていることが判明しました。宮城県内に目を向けると、仙台市郡山遺跡、東松島市赤井遺跡、大崎市名生館官衙遺跡など、７世紀末～８世紀初頭頃に古代国家が地域を掌握するために設置した拠点施設で、真北を強く意識して建物や区画施設などをつくっていることが大きな特徴となっています。今回の調査で確認されたⅡ期の建物群が同様の傾向となっていたことは、この地にも古代国家が成立に関わった施設が存在している可能性を大きく補強するものとなりました。

Ⅰ期の遺構では、材木塀と大溝は直接的に重複していないことから不明な点もありますが、主軸方向がほぼ同様であることから同じ時期に機能していた可能性があります。この２つの遺構が同時に存在していたと考えると、材木塀が開口している部分の形状では西側が区画の内部ということになります。今後周辺で調査を行った場合には、区画がつくられた時期や区画内部の詳細な姿が判明するかもしれません。

Ⅲ期の遺構では、主に竪穴建物と溝を確認していますが、Ⅱ期のような掘立柱建物は発見されていません。『延喜式』にみえる「玉前駅家」がこの地に存在した場合には、９世紀以降も役所的な施設が設置されていると予想できますが、今回の調査箇所でみられなかったことから９世紀以降は主要な建物をつくる場所を大きく変更していた可能性が浮上しました。

お問い合わせ　岩沼市ふるさと展示室
住所　〒989－2448　宮城県岩沼市二木二丁目8番1号
電話　0223-25-2302

市南長谷周辺に「玉前駅家」や「玉前剡」がつくられたと考えられてきましたが、詳しい場所については長い間不明でした。

平成 28 年度に実施した第１次調査は、圃場整備事業における排水路敷設に伴うものであるため、調査区の幅は２mと極めて限られた範囲でありました。しかしながら、掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴、竪穴建物、溝、土坑など多数の遺構を確認し、また６世紀後半～ 10 世紀前半にかけての遺物を多数発見しました。中でも７世紀後半頃に東海地方で作られたと考えられる須恵器の円面硯の出土は、この時期に文字を扱うことが可能な人物が当地に所在していたことを示すこととなり、官衙的な施設が設置された時期を考える上では非常に重要な資料となりました。

平成 29 年度の第２次調査は、第１次調査区の西隣で実施しましたが、さらに大型の柱穴跡が複数発見されたほか、建物がつくられる以前には材木塀が存在していたことが明らかとなりました。

第３次調査の概要

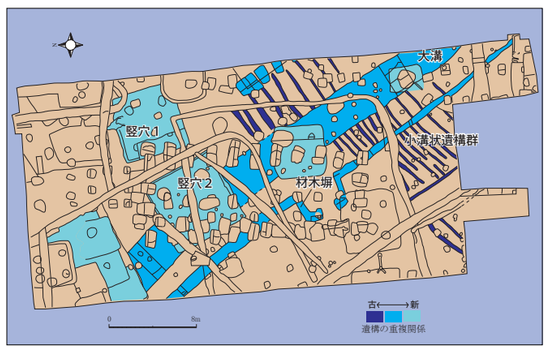
第３次調査は、第２次調査で発見された掘立柱建物・材木塀の全容解明を目的として実施しています。今回の調査では、掘立柱建物、材木塀、竪穴建物、溝、土坑、柱穴、小溝状遺構群が発見されました。これらの遺構は出土した土師器・須恵器などの土器の特徴から、古墳時代後期から平安時代にかけて機能していたと考えられます。中でも建て替えが行われたと考えられる大型の掘立柱建物の発見は、今回の調査の中で最も注目されることであり、この大型掘立柱建物が作られた時期を中心とし、以下に今回の調査で発見された遺構を３期に分けて、それぞれの時期の特徴をみていきます。

【Ⅰ期の遺構】

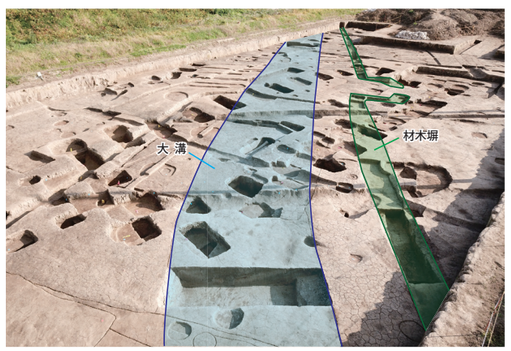
大型の掘立柱建物より古い時期の遺構を一括しています。発見された主な遺構は調査区の北西から南東部へ走る大溝と、その西側に存在する材木塀、そして材木塀と同様の主軸方位をとる掘立柱建物、竪穴建物、そして小溝状遺構群です。

大溝は真北から西へ約 40 度傾いてつくられ、断面など観察から３回の造り替えがあったことが分かります。材木塀は大溝の西肩から２m西側にあり、大溝と並行するようにつくられています。北から延びるものと、南側から延びるものが、調査区の中央付近でほぼ直角に西側へ 2.5 mほど屈曲しています。その先端にはそれぞれ柱穴がみられることから、門があった可能性があります。

Ⅰ期の時期については、古くは古墳時代中期以降であり、新しい段階はⅡ期の大型掘立柱建物である建物１より古い竪穴２から出土した遺物の年代観から、８世紀前半以前と考えられます。



Ⅰ期の遺構群



大溝と材木塀

【Ⅱ期の遺構】

大型の掘立柱建物の建物１・建物２をはじめとする、掘立柱建物群が形成された時期です。建物１と建物２は、ともに桁行 10 間（約 20 m）、梁行３間（約７m）を数える長大な建物です。この２棟の新旧関係は、真北より東に約２度傾く建物１が古く、真北より西に約２度傾く建物２が新しいものですが、南東隅の柱穴を基準としてほぼ同位置で、同規模の建て替えを行っていることから、同じ目的で使用していた建物である可能性があります。なお、建物１では内部を区画する柱穴は見当たりませんが、建物２の中央では南北方向にやや小型の柱穴列が認められており、間仕切りあるいは床束があった可能性があります。このほかの掘立柱建物では、主軸の方向から建物３が建物１と、建物４・５・６ が建物２と同時期に機能していた可能性が考えられます。

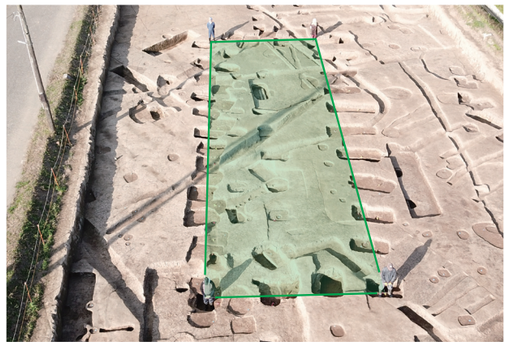
Ⅱ期の時期については大型の掘立柱建物である建物２の南西部で、８世紀後半段階の竪穴３がつくられていることから、８世紀前半から後半と考えられます。

【Ⅲ期の遺構】

竪穴建物群、溝、土坑で構成されます。調査では４軒の竪穴建物跡を調査しており、大型の掘立柱建物である建物２より新しい竪穴３からは８世紀末葉頃、北側に位置する竪穴５からは９世紀後半頃の土師器・須恵器が発見されています。

Ⅲ期の時期については、竪穴３が８世紀末葉頃であり、第２次調査でも確認されている溝１など複数の遺構で 10 世紀前半に降灰した灰白色火山灰を含むことから、８世紀末葉～ 10 世紀代と考えられます。

Ⅱ期の遺構群


大型の建物2（人が立っている場所が建物の四隅）

Ⅲ期の遺構群

大型建物より新しい竪穴3から出土した土器